受難節第５主日礼拝説教「光はあるのか？」予稿

日本基督教団石神井教会　2024 年 3 月 17 日

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙　2章8～15節

8人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。9キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており、10あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです。キリストはすべての支配や権威の頭です。11あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、12洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。13肉に割礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださったのです。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、14規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　12章20～36節

20さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。21彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。22フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。23イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。24はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。25自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。26わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

27「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。28父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」29そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。30イエスは答えて言われた。「この声が聞こえた

のは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。31今こそ、この世が裁
かれる時。今、この世の支配者が追放される。32わたしは地上から上げられ
るとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」33イエスは、御自分が
どのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。34すると、
群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつも
おられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならな
い、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」
35イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇
に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、
自分がどこへ行くのか分からない。36光の子となるために、光のあるうちに、
光を信じなさい。」

**「お目にかかりたい！」【こども説教のために】**

「受難節（レント）」の四十日の旅は、わたしたちを「冬」から「春」の季節へと向かわせます。「冬」の暗さ、冷たさから、「春」の明るさ、温かさへ。その旅路は、一直線ではないかもしれません。それでも、わたしたちは、「冬」から「春」に向かう道を、旅して行くことができるでしょう。この旅の道案内をしてくださるのが、主イエスだからです。

主イエスは、わたしたちに、「**光のあるうちに歩きなさい**」とおっしゃいます。暗闇に包まれて道を見失い、歩けなくなってはいけません。歩いて行かなければ、旅の目的地にたどり着くこともできなくなってしまうでしょう。「春」を迎えることができなくなってしまいます。「春」の明るい光の中に入っていくことができなくなってしまいます。主イエスは、わたしたちがこの旅を最後まで続けて、「**光の子となる**」ことができるように、「**光**」となって道を照らし、わたしたちを照らしてくださっているのです。

この旅の最後に、主イエスは、わたしたちを、「エルサレム」にお導きです。主イエスの「十字架」へと、わたしたちをお連れになるのです。それは、「真冬」のような、あるいは「真夜中」のような、暗闇のところです。主イエスは、その暗闇の道を通って行くように、お導きなのです。けれども、恐れる必要はありません。その暗闇の中でこそ、わたしたちは、旅の目的地を見ることになるからです。

そのときは、近づいています。今からでも、この旅に加わりましょう。「**お願いです。イエスにお目にかかりたいのです**」。そう、今からでも遅くはありません。旅の終わりが近づけば近づくほど、わたしたちの心は、主イエスに向かうようになるのです。主イエスにお目にかからずにいられなくなるのです。主イエスは、どの一人のことも拒まれることはありません。

**「光の子となるために」**

先週の午後、わたしたちの教会役員会は、「洗礼」を志願して新たに「光の子」となることを願う方をお迎えして、試問会をいたしました。その際、わたしは、役員の皆さんに事前に一つのことをお願いしました。「まだ洗礼を受けたわけではないので、志願者には、祝福の言葉ではなく、信仰の歩みを一歩先に行く者としての励ましと助言をしていただきたい」ということです。役員の皆さんは、わたしの申し上げたことをよく受けとめてくださったようです。志願者は、役員の皆さんをはじめとする教会の皆さんに伴われて、「洗礼」の日に主イエスとお目にかかり、結ばれることになるでしょう。そして、「**光の子となる**」のです。

主イエスは、わたしたちが「**光の子**」となることを願ってくださっています。そのためにこそ、主イエスは生きてお働きくださったのです。十字架に向かわれて、「光の子」のあるべき姿をお示しくださったのです。わたしたちが教会へと導かれてくるのも、その「神の光の子」としてのお姿をお見せくださる主イエスとお目にかかるためです。ここで、わたしたちは、主イエスとお会いしているのです。

もちろん、わたしたちは、二千年前の弟子たちのように、自分の肉眼で主イエスの人としてのお姿を見ることができるわけではありません。それでも、わたしたちは、主イエスとお目にかかることができるでしょう。お会いすることができるでしょう。大勢の主イエスと結ばれた先達がいるからです。ここにも主イエスと一つにされて「光の子」として歩んで来られた皆さんがいらっしゃるからです。

使徒パウロが言うように、わたしたちは、「**洗礼によって、キリストと共に葬られ、また…キリストと共に復活させられた**」者たちです。キリストと共に葬られ、そして復活させられたのは、もはや、わたしたちが古い自分ではないからです。新しい人、キリストと結ばれた「光の子」だからです。

もちろん、わたしたちは、自分がそうだと自信を持って言えるようなものではないかもしれません。洗礼を受けても、なお、わたしたちは、自分の中の暗闇を知っています。捨て切れずにいる古い自分に、わたしたちはいつも難渋しています。暗闇に光を照らすことよりも、暗闇の中で安住したいという誘惑があります。なぜか古い自分を誇らずにいられないのです。

それでも、主イエスは、わたしたちが新しく生まれた「光の子」として生きることを、願ってくださっています。今の時代が、暗闇に覆われているからです。暗闇に押しつぶされている者があるのです。その人たちが「光」を見ることができるようになるために、「光の子」は求められているのです、世に「光」を照らす「光の子」として歩んでいくことを。

**「すべての人を引き寄せよう」**

エルサレムに向かわれ、十字架に向かわれる主イエスは、言われます。「**一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ**」。主イエスは、ご自分の命を捨てる、とおっしゃるのです。そうすれば永遠の命に至る、と言うのです。

四年前に起こった感染症の騒ぎを通して、わたしたちは、世界中で「命」の問題を突きつけられてきました。全世界の教会で、主のご復活を祝うイースターに集まることを自粛しました。主の葬りとご復活の記念をやめてしまったのです。当時、ほとんどの教会がそうするしかなかったでしょう。けれども、それは、教会にとって本当に正しい判断だったのでしょうか。

先週、北支区の牧師会に出席してきました。出席した牧師たちがそれぞれ、感染症禍の中でどう過ごしてきたか、今どのような判断をしているのか、語りました。一人の先輩牧師は、ちょうど四年前に転任して来られて、教会の様子もわからぬまま判断を躊躇された、ということを話されていました。結局、その先輩牧師は、ご自身の家族に「命が大事でしょう」と言われて、礼拝や集会をすべて閉じる判断をされたそうです。その話を聞いていて、わたしは、どこか腑に落ちない思いがしました。「それは、本当に命を大事にし、尊ぶ判断だったのだろうか」と。

「**一粒の麦**」は、「**地に落ちて死ななければ、一粒のまま**」です。「一人の人」は、「地に落ちて死ななければ、一人のまま」なのです。そうしてこそ、「**多くの実を結ぶ**」のでしょう。「**永遠の命**」を得るのでしょう。

主イエスは、ご自分の死を「**栄光を受ける時**」とおっしゃいます。神に命与えられた者として、「神の光の子」として、もっとも光り輝くとき。それは、「**地に落ちて死**」ぬときだとおっしゃるのです。「**一粒のまま**」では、そのときを迎えることはできません。「**死ななければ**」ならないのです。

けれども、それは、英雄的な「死」でも何でもないのでしょう。主イエスの「死」は、十字架の「死」なのです。地に葬られる「死」なのです。しかし、「地」に落ちた「死」なのです。この世に、人々の生きるこの大地に、人々の命を育むこの地に、蒔かれた「命」なのです。

主イエスは、この「命」の営みへと、わたしたちをお導きなのです。「永遠の命」の交わりへと、わたしたちすべての者をお招きくださっているのです。お引き寄せくださっているのです。「永遠の命」をすべての者に得させるために、「光の子」らをお遣わしなのです。

「光の子」らの教会は、主の葬りのときに向かいます。主のご復活の交わりにすべての者が引き寄せられ、結ばれ、一つとされるまで、主の葬りの記念は、続けられるのです。